

2024年7月21日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教2「神の子となる資格」

詩編2：7～12、ヨハネ1：6～13

今日は6～13節が与えられました。ここには少々唐突な印象がありますが、洗礼者ヨハネのことが出てきます。さらに申しますと1～18節という括りでこの福音書の冒頭を考えます時に、15節にも洗礼者ヨハネのことが出てきます。この1～18節をヨハネ福音書全体のプロローグ、キリストへの賛美告白的な部分とするならば、この6～8節と15節は、明らかにこの流れになじまない、異質なものと捉えられます。ですから注解書によっては、ここを初めから括弧に入れてしまう。元々の本文にはない、後から挿入されたものと考えます。

しかし一方で、このなじまない部分をどうしてここを残しているのか。そこに福音書を書いた人の伝えたい想いが込められているのではないかと思います。準備の中で、これはほとんど古典といってもよいものですが、アドルフ・シュラッターというドイツの牧師が書いた注解書を読みました。今日の箇所のところには次のような文章がありました。「信仰において人間は、光に身を委ね、その奥深いところに突入し、光に捕らえられ、動かされるのである。私たちはみな、暗さから引き出されて、キリストの明るい輝きの中に移されることによって、私たちすべての者に、信仰への招きが発せられるのである」(『新約聖書講解ヨハネによる福音書9頁』)

キリスト告白的な流れの中になじまない洗礼者ヨハネが入り込む。それは、このなじまないものをあえてご自身の光の中に取り込まれる神さまの恵み、信仰への招きと理解したいと思います。考えてみますと、そもそもわたしたちは、初めから神さまの救いになじまない者です。それをヨハネ福音書は初めから明らかにしています。「暗闇は光を理解しなかった」(5節)「世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」(10～11節)理解しない、認めない、受け入れない。ことごとく拒否しています。今日は「神の子となる資格」という説教題ですが、もしも神の子となる資格が必要ならば、誰一人としてそのような資格はないと言わなければなりません。わたしたちは御前に罪を犯し、その資格を自ら放棄しています。けれどもそのようなわたしたちが神の子とされたのは、ただ恵みとしか言いようがありません。もしその資格があるとすれば、それは13節にあるように「神によって生まれた」ということしかないのです。その根拠は人間ではなく、人間の血統や、肉の思いではなく、神さまにこそあると言わなければならない。人間の力が神の子になることを可能にしているのではないのです。

そして、その神さまの力によって生まれた者の代表、先駆けが洗礼者ヨハネなのです。そこにわたしたちも続きます。わたしたちもヨハネのように光の中に捕らえられてしまっている者の一人です。7節の「すべての人が彼によって信じるようになるため」この「彼」をヨハネに限定する必要はありません。わたしたちもこのヨハネに続くのです。今月は、家族や隣人への執り成しを祈りの主題にしております。わたしたちは、この礼拝からそれぞれのところに帰って行きますが、そこには家族や地域の人々、職場の仲間がいるでしょう。わたしたちは、その家族やこの地域の人々に先駆けて神さまによって生まれた神の子です。すべての人が信じるようになるために先に選ばれたのです。わたしたちの言葉や行動、その一挙手一投足がイエスさまを指し示すものになっています。もちろんその資格はないですし、証しにならないことが多いかもしれません。それでも神さまは、わたしたちを召しておられます。

もう少しこの点を深めていきましょう。「彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである」(7節) ヨハネは証しをするために来たと言います。洗礼者ヨハネの目的がここにあります。それは「証し」です。実はこの「証し」と訳された言葉マルトウレオーは、圧倒的にヨハネ福音書に多い言葉です。ヨハネに特徴的な言葉と申し上げてよいでしょう。その意味としては、「証言」とか「証人」という法廷用語です。例えば、裁判で証言する場合、その証人は真実を知る人です。真実を知っているから証言できるのです。知らない人は証人にはなれない。当たり前のようなことなのですが、ここが重要です。証言する、証しすることができるのは、真実を知っている者だけなのです。

ヨハネがイエスさまを証しすることができたのは、そのイエスさまの光を知っている。その光の真実、確かさを体験しているからです。人間の資質の問題ではありません。9節に「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らす」とあります。「まこと」「真理」これはアレセアという言葉ですが、これもヨハネ福音書に特徴的な言葉です。この後も「恵みと真理に満ちていた」(14節)「わたしは真理である」(14:6)と言われます。イエスさまこそアレセア、真理です。このイエスさまに捕らえられたもの、その救いの確かさに触れたものは、これを証言せずにはおれないのです。何より受肉のイエスさまにこそ、その救いの確かさは現れたと申し上げてよいでしょう。

わたしたちはこの世に真理があるような感覚を覚えるかもしれません。目に見えることが確かなことだ。でも本当にそうでしょうか。この世のものほど不確かで、偽りに満ちているものはないのではないのでしょうか。特に今の時代はAIの発達によって、様々なものがあたかも真実であるかのように偽造され、それに人々は翻弄されています。何が真実かわからないので、自ら真実を作り上げてしまう。そしてそれが真実になってしまう。恐ろしい世界です。けれどもそのような世界にあって、わたしたちは永遠の真理を知っています。信仰の確かさ、救いの確かさを知っています。イエスさまにこそ真理がある。まことの光がある。その光のもとへわたしたちは招かれているのです。「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」(9節)

先週は、友人の牧師が天に召されて、葬儀がありました。葬儀の中で知ったのですが、次の日曜日にも彼は礼拝説教をするつもりでした。彼の体には、教会の玄関に掲示されていた日曜日の説教題が記された紙がかけられていました。彼は最後まで牧師としてイエスさまを証しする生涯を生き切りました。でもそれは彼の力ではない。彼が真理の光に触れたからです。恵みにあずかり、まことの光の中に捕らえられていたからです。だから証しをせずにはおれなかった。イエスさまを伝えずにはおれなかった。わたしたちはそういう生き方ができるのです。それぞれの仕方で、与えられている場所で、まことの光を輝かせていく、イエスさまを証しする。それはとても幸いな人生です。

天の父よ。神の子となる資格のないものをそれでもあなたの光の中に捕らえてくださり、まことの光を証しするものとしてくださる幸いを感謝いたします。この世にあって、わたしたちはその先駆者として召されています。どうぞその自覚を新たにし、すべての人々の救いのために歩むものとさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。